

花祭の祭文考

— 「しめのはやし」(富山)を通して —

On the Chant of Hanamatsuri-festival in Kitasitara-area

春日井 真 英

Shinei KASUGAI

要旨

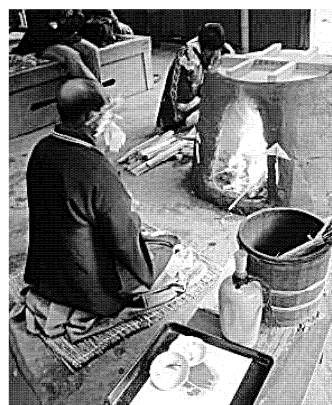
It is the purpose of this paper, to explain the religious ceremony which sanctifies the place where Hanamatsuri-festival held. Nowadays the festival is conducted at public facilities, such as a community center and so on, but formerly the festival was held at private houses.

At the ceremony 宮人(Myodo), a kind of priest, holds a divine service to sanctify the house as a sacred area. At the time he utters the chant to invoke the peculiar spirits of the sacred place. Of course there are many kind of chants, as 「神寄せ」(as calling gods to the sacred place) or 「殿付け」(setting gods in the ceremonial area). The chant, which I am going to handle, is now changed.

The chant invokes the origins of the furnace, which tells the reason why the place is sacred. After the chant the people who attend the ceremony are aware of the holiness of the place, and give their approval.

Today the meaning of the chant is missing, so in this paper I try to describe about the lost meaning of the chant through Hayakawa Koutaro's works and the historical materials of Tomiyama-Village(富山村).

この論文は、花祭の儀礼の背景を探るものである。今日では、花宿は公民館などになってしまっているがかつては民家で行われてきていたものである。この宿が神聖な祭儀空間に変容する過程で、どういことが行われているのかを説いたものが、祭文である。一口に祭文といってもたくさんあるが、ここでは花宿を聖化する手順の中で唱えられるものについて検討してみたい。「神寄せ」「殿付け」など神事に先だつての祭文は一般的によく知られているが、祭場を決定し、そこを祭場と認定してい



(布川・花太夫による竈破い)



(古戸・市の舞)

く過程の祭文については、あまり意識されていないと言っ
て良い。ここでは、早川孝太郎の著作を基に、さらに富山
村などの資料を使って、祭場を聖化する過程を考えてみる。

本論

- * 1 はじめに
- * 2 祭の始まり
- * 3 聖化される空間
- * 4 「しめのはやし」を考える

* 1 はじめに

三河から遠州、そして信濃の山間にかけて旧暦の霜月に夜を徹して行われる行事がある。それらは、湯立て神楽と呼ばれたり、霜月の神楽とよばれている。その中で、愛知県北設楽郡各地で行われている神楽は、花祭り、花神楽などとも呼ばれている。この神楽は早川孝太郎の『花祭』（註1）で一躍世に知られるようになった。その著書の精密な記述から、すべて分析され尽くされているかのような錯覚を引き起こさせてくれる。たしかに、詳しい。しかし、花祭そのものはまだ十分に調べ尽くされていないと考えても良い。それは、早川孝太郎が世に問うた『花祭』が、あまりにも詳しく、それ以上ないほどに多くのことを書き記しているからである。もはや消滅してしまった神楽や舞など、彼の著作はじつに多くのことに及んでいる。それ故に花祭は、すでに調べ尽かされてしまっているかのような感がある。しかし、はたしてそうであったろうか、早川は古老たちの述べていることをしっかりと聞き取りを行ってきているが、それを検討すると言うことは少なかったのかも知れない。筆者は祭が行われる舞庭（マイド）と呼ばれる「祭儀空間」の重要性を指摘し、そこでの方位について何回も取り上げ、問題を指摘してきた（註2）。その詳細は省くが、ここでは花祭に関して、特に述べていない場合は『早川孝太郎全集』（未来社1971）の「花祭」（Ⅰ）、（Ⅱ）を用いて行くことにする。

早川孝太郎の業績は大きい。彼の著書『花祭』には古老たちからの様々な聞き書きや資料が取られている。しかし、事実を伝えるということに重点が置かれているために、その資料分析にまでは及んでいないと考える事ができるのである。著者が、この花祭に手を染めたきっかけは東栄町の新しい親戚から「見に来ないか？」と誘われたことにあった。

誘われて十二月初旬の中設楽で、榊鬼の庭入りに感銘を受けた。シンシンと冷えた深夜に突然の大歓声の中に榊鬼が舞庭（まいど）に入ってきた場面に、人々の熱気とともに、人ならざるも

のとの交流が意識できたいっていいだろう。このときの体験が原動力となって、一気に年明け早々の古戸から、下粟代へと花祭の見学が始った。とくに下粟代では民家を花宿とする花祭を見る機会を得た。場所が異なれば、微妙に祭祀が異なって行くのを見た。特にここでは民家の構造の違いから、辻固め、高根祭の位置関係の違いにふれ、今日の研究の基礎を得たのである。通常の民家では、南に庭が来るのに対し、左構えの民家では庭の位置が逆に、つまり北になる。このために、民家の奥デイ（奥の間）の位置が異なり、祭儀の行われる空間が百八十度回転することを下粟代で体験したのである。

* 2 祭の始まり

高根祭、辻固めという、二つの祭儀の位置関係については早川孝太郎は次のように述べている。

祭、そのものは切り草などの準備（舞庭を荘厳する諸々の用意をする）があり、刀だてと称されている。ここでは、本祭りとも言うべき、当日の祭の儀式について 考えていく。これは舞庭（まいど）と呼ばれる祭儀空間の祓い、「うちきよめ」からであるが、本論では、この「うちきよめ」の段階を問題としたい。本来は祭場の設定が合ってから、「滝ばらい」（滝の水を汲む）、などの行事が粛々と執行されていくべきものだと考えるのだが、早川はさらに花宿の選定は法は、これまた土地によって一定ではないが、根本の思想はほぼ共通であった。この場合もっとも自然の方法は、宿主の立願に待つもので、あらかじめ花宿たることの申し出をうけたのである。（註3）

と、している。さらに立願があったとしても、その地がいかに祭にふさわしいかという厳密な修法は行われていないことは、彼の著作から容易に見ていくことは出来る。ただ、早川は

（略）行事開始より「かたなだて」までのなかで、竈を築く花宿の定めで、祭祀の七日前に行ったと記している。その中で、注目すべきは竈を築くところで、はまみずを迎え、湯立てを行い、その湯の一部を桶に移し屋敷の祓いをするとしている。そして、湯立てはすべて秘法とされ、呪文を唱え九字を切り五印を結ぶ等の次第があるが、根本となるものは「がく」すなわち音楽と歌謡である。音楽は笛と太鼓で、歌謡は「ウタグラ」と称しているこのときの「うたぐら」は、湯立てに至るまでに材料として選ばれた物の、神聖であることの所以を説いたもので、たとえば竈を築いた石や土から、炊く櫓（ほだ）の末に至るまでを残らず数え上げたものである（註4）。（以下、下線部筆者）

と、記している。

早川の記述に従って考えると、湯立ては注連降ろしの段階でも行われる。しかし、それは竈払

いであって湯立てではないのである。厳密な意味での竈払い、湯立てがどこかで混乱し、紛れあってしまっているかと考えられる。竈払いは振草系では、神入れの後に行われている。竈に滝の水を注ぎ、湯を沸かし、湯立てが行われてはいる。しかし、竈の由緒、舞庭の由緒についての祭文、あるいは唱えごととは聞き取れなかった。早川は、各種の称呼（早川 花祭（I） 103頁）で神入れの次第は各所で幾分ずつ形式が異なっていると指摘し、とのづけ、とのいり、しめおろしも、神入れ、あるいは神おろしであるとしている。さらに、古戸では祭の面形を迎え入れる式ともかいている。さらに、「しめおろし」は「とのづけ」とも言っていたと指摘し、さらに神入りは、神下ろしの一方に、祭に関与するものの、神人の資格を持って初めて式に列する場合の意味にも考えられている（早川（I） 104頁）と指摘している。たしかに神勧請の式であることには変わりはないわけだが、祭場が設定されていく過程について何も述べられてこないというのは大変奇異に写るといえる。

ただ、早川は竈ばらいについて次のように記している。

竈の祓い「しめおろし」が終わると、禰宜は「ゆわぎ」の上に「ゆだすき」を掛け舞庭に下りて「竈ばらい」に着手する。「竈ばらい」は文字通り竈の祓いと考えられていて、すなわち湯立ての一部でもあり、当日竈に火を入れる最初である。

と、概要を述べ、さらに本文の註で大入系御園にふれ、そこでは、正副二人の禰宜で行うと記している。さらに月地区では、竈祓いに引き続いて、湯立てがあると記している。また湯立ての意義で、禰宜にはおのおの口伝によって湯殿建設の由来を説く唱えごとがあると指摘している。しかし、そこでのうたぐらは

湯の父の湯殿へ御渡る湯衣は たけが七尺袖が六尺

湯の母の湯殿へ御渡る湯衣は たけが七尺袖が六尺

と（註5）、唄われるとしているが、祭場、あるいは竈設定に関わる由来についての唱えごとは紹介されていない。

祭場設定の段階で重要な役割を果たすのが、「滝ばらい」であり、その次に位置するのは「高根祭」、「辻固め」であろう。だが、祭場の中に導きいられる「水」と捉えるならば「滝ばらい」の水は、単なる聖なる「水」以上のなにかという意識を持たなくてはならなくなる。つまり、水そのものが神の象徴と言うことになる。そして、「高根祭」と「辻固め」はそれぞれ上空と地

上から来る諸霊に対応するものと理解することが可能となるからである。この滝の位置関係も微妙な問題を含んでいる。最近では滝ばらいの位置が一カ所に固定化されているが、祭文や、伝承では七カ所以上の滝の水を汲上げると唄われている。

くりかえすが設定される祭場＝祭儀空間、つまり花祭の舞庭は、実に特別な意識の下で設定され、構築されて行かなくてはならなかった。花宿は、かつてはそのように厳粛に聖なる場所として「見立て」られていたことが祭文などから読み取れるのである。

そして、その第一歩が、高嶺祭(高根祭)である。早川の記述を引用しながら述べていきたい(註6)。

高嶺祭り

かどじめ(門ノ)の一部行事 高嶺祭りは祭場(花宿)を中心にして、定められた地域内に区割を設ける「かどじめ」の一部行事で、これを一に四方門を打つとも言う。祭場すなわち花宿の戌亥に当たってなるべく小高い地点を選んで、そこに棚を設け弊を立て(梵天の場合もある)供物を供える。この次第を一に天狗祭り、または荒神祭りとも言っている(註7)(花祭では図11として写真が添付されているが、それは古戸、下粟代、月、中設楽、足込のものに似ている。ただ、第24図(早川(I) 101頁)で示されている 振草系 足込とあるようなものを見る機会はなかった)。時代の微妙な変化がそこにあるのかも知れない。

また、この高根祭に対応しているのが辻固めである。

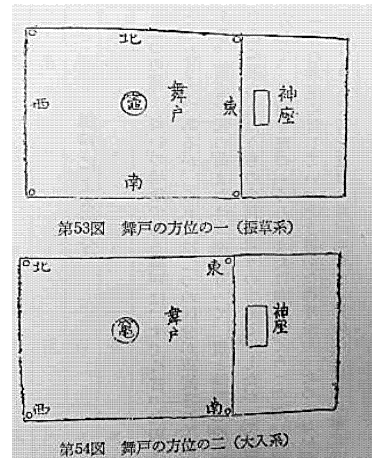
辻固め

地上の諸霊を防ぎ祀る つじがため(辻固め)は、高嶺祭りと同時に行われるもので、この二者を合わせて「かどじめ」と言う。よって、高嶺祭りを戌亥の方角で行えば、これは辰巳である。しかしこれは祭場の位置と状況によって、逆に行う場合もあり、位置は確定的なものではない。「つじがため」は高嶺祭りがすべて上空すなわち中有から来る諸霊を祀ると考えていたのに対して、これは地上の諸霊をここに防ぎ祀ると考えられていて、そこに弊を立て同じく供物を供える。なお、最後に二者ともに五方位に向かって餅投げのことがある(註8)。

早川は、この辻固めの中で祭場の位置と状況によって異なってくるもので、確定的なものではないと言っている。ところが、この位置と状況とはどのようなものかについては何も触れていないのである。筆者は、先にも触れたが下粟代の民家を花宿とした事例を二件も見つかる機会を得た。その後は、残念ながら公民館で行われるようになり、民家を花宿とする事例に遇っていない。この時の事例が興味深いのは、民家の構造が異なっていたことにある。初めて見た、民家の事例は、左構えといわれる家で行われたものであった。通常、民家の出入り口あるいは庭は南に面してい

るのであるが、左構えの家では、それが逆になる。つまり、北に面することになる。それに伴って、民家の構造そのものが逆に配置されていることになる。特に、奥殿（デイ）と呼ばれる奥の間に戌亥角ではなく、辰巳の角に来るといって良い。そして、この奥デイと呼ばれる奥の間の位置によって舞庭と神座の関係が、大きく影響を受けるのである。早川は、この辻固めと高嶺祭りの位置関係を、祭場の位置と状況によるとしているだけで、理由については何も触れていない。

だが、民家の構造の問題を考えれば、高根、辻の祀る位置が異なるのは明確である。これは早川の記す「舞庭による区分」の第五三・五四図（註9）とも関わってくる。ただ、この早川の図は実際の方位と重なっていることが無視されている可能性がある。なぜならば、通常の民家は南に向かって開け、奥デイが戌亥（西北）、そして入口が辰巳に向かって伸びるといふ民家の地域的特性を有しているのである。そのために、早川の記述では民家の実際の方位が意識されていなかったと考えられるのである。この家全体の構造の認識の仕方が根底にあるために、舞庭の基準となるべき方位が変わり、早川言うように、「祭場の位置と状況によって異なる。」事になる。



第53図 舞戸の方位の一（振草系）

第54図 舞戸の方位の二（大入系）

（早川孝太郎全集 I より図53、54）

ときには、舞庭の四方の忌み竹から引かれる千道の色彩（五方位を表す色彩は、東方＝青、西方＝白、南に＝朱、北に黒（紫）で示されている）とずれるなどの問題が生じる。早川は「舞庭の飾り付けの様式」（早川（I） 77～79頁）で、この方位に関連して、次のように述べている。

方位は四隅の柱を基準とする関係上、正位の柱が、神座から見て右側に片寄ること、「びゃっけ」は湯蓋との間隔が振草系より大きく、神座と竈の中間上に飾られ、ことに三沢・下黒川の神道は、四方の及ぶことなく、湯蓋を起点として東柱の傍の「びゃっけ」に通じ、さらにこれを通過して、家の中心の柱に設けたぼでん（梵天）に通じていたことである。・・・（中略）・・・ただ古真立の場合では、竈の傍らに、別に榊のやや大なる幹が一本立っていて、これが中央の意でもあった。そしてこの榊の枝々には、五色の弊が下がっている。

この記述で梵天、さらには「湯蓋」の傍らの「びゃっけ」に関わる記述は大変重要なものだと考える。それは、中心と繋がっていることを象徴しているからであり、花祭の根底に潜む「生まれ清まり」の問題に関わるからである。

早川は舞庭の飾り付けに関して第一三、一四図（註10）を付して、振草系と大入系の飾り方の違いを示している。

ところで、花祭では五方位（東西南北・中央）が重要な意味を有し、祭場の基準方位が東であることはすでに前提とされている。そして儀式はすべて、この五方位を元に行われていく。そのことは、準備される祭具の中に五色の弊や、色紙などで「五」という事が強調されている（早川98頁）。また、注目すべきところは、五方位を神と仏に合わせているところであろう。そして、諸神諸仏を祭文を唱えながら勧請していくのが「トノズケ」「カミヒロイ」などと呼ばれているものである。（早川（I）106頁）。なお、五色弊は五色の色紙で作った幣束であり、東＝青、西＝白、南＝赤（朱）、北＝黒（実際は紫）、中央＝黄で示されている。

この、五方位の「東」のどのように設定するかということについて、問題とすべきことは多々あるかも知れないが、祭の基準となる方位を東とすることは当然のことと理解しておきたい。だが、舞庭という特殊な祭儀空間の基準の根拠となるべき指針があやふやであってはならないと考えるのである。早川は、先に触れたようにどちらの場合も、竈、神座という位置を指定している。しかし、筆者は拙論で（註11 拙論）振草系の花祭での高根祭・辻固めを検討し、方位の基準が祭儀の中で変動していることを指摘した。つまり、神座で諸々の儀式、あるいは祭儀を行うときは神座が基準として東であり、竈の前 クロ で儀式や舞が行われていくときには、竈の焚口の方が東として、認識されていたのではなかったろうかと考えたわけである。その理由は、二回におよぶ神降ろしにある。舞庭での儀式、この段階ではまだ神は神座に招かれているに過ぎない。そして諸々の神々を迎えた後に神座から舞庭へ 祭場へと踊れる事となる。つまり、神座で行われる神迎えの段階では基準は神座に置かれる。そして、舞庭に役割が移って後、竈に基準が設けられることになるのである。

* 3 聖化される空間

基準（ここでは、方位）が定まらないと神々の来臨する道も判らなくなる。この五方位は様々な唱えごとの中で用いられているが、そのつど、正しい方位（実際の方位とは異なり、幣束などで象徴される東に向き）神々を迎える方位、場所が明確にできるといえる。神々のいる位置あるいは、方位が明確になることによって安心して諸々の儀式を行っていくことができるのである。基本は東であり、東の象徴する世界が問題となる。

東栄町古戸の白山でも高嶺祭が行われる。もちろん。麓の祭場でも行われるわけだが、他の地区との比較もかねて唱え事を並べてみる。

東方や観音の浄土でめぐり逢う

南方や薬師の浄土でめぐり逢う

西方や弥陀の浄土でめぐり逢う
 北方や釈迦の浄土でめぐり逢う
 中央や大日浄土でめぐり逢う（註12）（下線・筆者）

同様に中在家でも 殿付けの祭文＝神入り、「へやいり」神々を東西南北中央の五方位に位づける）（註13）名称は異なっている、神々の祭場への勧請であることには違いがないので同じと見なしていく。

ところで、唱えごとに注意をしなくて置かなくてはならない。この古戸の唱えごとでは、通常の方位と合わないのである。通常ならば、東方薬師、南方観音、西方阿弥陀(弥陀)、北方釈迦、中央大日となるべき方位なのである。

この他にも、勧請する神々を、太郎、次郎などと順番で呼ぶところもある。

再拝再拝と敬って此御所(ママ)で八百万の御神様を拝み開き殿付け勧請申也（中略）
 謹請東方大神太郎の御神
 謹請南方大神次郎の御神
 謹請西方大神三郎の御神
 謹請北方大神四郎の御神
 謹請中央大神五郎の姫宮
 かみの守護神一社ももらさずかの御所で拝開き殿付け勧請申也(下略)

しかし、仏から神へと呼び方が替わったり、逆に神から仏への変化がいつ頃なされたかのかという問題があるが、このあたりは「廃仏毀釈」との絡みで考えなくてはならない。神名、あるいは仏名での勧請については祭に携わる人たちにとってそれほど問題ではなかった可能性もある。また、この神仏の名前は地区によって微妙に異なっていることがあるという指摘にとどめておきたい。ここで注連おろし、あるいは神勧請の場面で用いられる祭文を比較検討することとする。

早川は「しめおろし」（註14）の祭文を引用しているが、それがどこの祭文であるかは明確にしていない。この行事は早川が記すように

行事は多く神座で行われる。その次第は、禰宜「みょうど」（ママ）それぞれ祓幣を持ち、まず東方に向かって中央に立つ。このときの各自の位置は、禰宜は一步離れて立ち、「みょうど」は一列ないし二列にその後ろに並ぶ。かくして楽拍子につれて足踏みをなし、手にせる幣を軽く前後に振りながら、次の歌詞を唱える。となえかたはすべて「うたぐら」の歌詞である。

注連おろし 下ろすさとさに千早振る
 ちはふる神の前となるらん
 東方東は薬師の浄土で注連おろし
 下ろすさとさに千早振
 ちはふる神の前となるらん

次に南方観音・西方阿弥陀・北方釈迦・中央大日と一方に三回ずつ順次繰り返す。このとき東から順次南西北と方向を変えて、北から逆行、東に向かってこれが中央であることはすべて他の五方位の場合と同じである。

そして、花祭は祭場＝舞庭を山と見立てるところに興味がある。早川も言うように、この「山立て」の儀式によって、舞庭は一つの山に仮想されるのである。(註15) このことについては、改めて「榊鬼」の問題で扱ってみたい。

そして次第は、「鳥祭り」に移るが、これは、「しめおろし」、「やまたて」一連の行事と見る方がわかりやすい。また注意すべき事は、個々で五方位に投げられる餅の形である。早川は(註16)沓形と言っているが、この形で餅を投じるところは現在では月地区しか確認していない。ここには、微妙な変化がある。この他にも重ね餅の上に乗る餅の形状にも注目すれば、興味深いものを見ることが出来る。

そして、「なりもの」の行事の時に

東方東は薬師の浄土で
 すずめがつついて なりものなって
 ふうきしてん くうらうもの
 そうしょのくすりの とりてふやまか
 ぞんじょうなれば やあまとことばも ようそへて いう やすきたからなり

と、唱えて餅と串柿を東西南北と四方の注連に挟むのである。ここでも、四方の後に東に戻って今一度繰り返すことで、中央を象徴させている。「なりもの」とは筆者は「鳴り物」の事であると理解したい。しかも、それは雀という言葉から、五穀豊穡の証となり、単に鳴り物と理解するならば、それは「楽」であり、「太鼓」であるのだが、雀がならず鳴り物とは雀脅しであり、背景には豊作を歌い上げている姿があると、言えよう。「富貴」(ふうき)したことによって人々が安心して、開催できる祭への予祝の祝歌である。「そうしょ」(宗匠か?)のもたらす薬とは、長命をもたらし、富貴した人々への安堵感をもたらす唱えごとになろう。唱え事は、次の「ごこく

祭り」の段で微妙に変化するのである。筆者は、この段階での餅と串柿を四方の注連に挟むことにも関心を有している。ようやくにして、神座を神聖化したことになり、依り代としての「餅」と「串柿」が神迎えの象徴化された姿を意味していることになる。だが、串柿をどのように理解すべきだろうか。東栄町では、正月に歯固めを行うという。東栄町本郷で聞いた話では元旦に恵方から汲んできた「若水」でお茶を飲む際のお茶請けであり、その干し柿の中に入っている種の数によって金運を占うと言われた。餅と、干し柿に福の神の予祝を見ることができるとは、最後の行の「やあまとことばも ようそえて いうやすきたあからなり」で示されていることになろう。

さらに、儀式は「ごこく祭」へと移るが、見ているだけでは解らない。早川はここでの唱え事を神おろしの宝揃えの詞の変形と見ている。

東方東は句々迺（早川ママ）馳の社で
 つるがつるいで ほうしのくすりに
 なりものなつて ふつきして
 天竺のくうらうぼんの ほしのくらいひで
 とるてふやまに

そして以下南方軻遇突知・西方金山彦・北方罔象女・中央埴山彦と唱えると記されている。
 (註17)

注目すべきは、中央には姫神が存在していないことである。北に罔象女が来ているが、これは女性神であり、先に触れた
 中在家 殿付けの祭文＝神入り、(註18)では

再拜再拜と敬って此御所(ママ)で八百万の御神様を拜み開き殿付け勸請申也(中略)
 謹請東方大神太郎の御神
 謹請南方大上次郎の御神
 謹請西方大神三郎の御神

 謹請北方大神四郎の御神
 謹請中央大神五郎の姫宮

かみの守護神一社ももらさずかの御所で拜開き殿付け勸請申也(下略)
 のように、中央に五郎の姫宮が迎えられているのと比較すると微妙である。

このように、唱え事の中で注目したいことは仏の名前であり、方位のずれである。さらに、古戸白山の高嶺祭りでの唱え事

東方や観音の浄土でめぐり逢う
 南方や薬師の浄土でめぐり逢う
 西方や弥陀の浄土でめぐり逢う
 北方や釈迦の浄土でめぐり逢う
 中央や大日浄土でめぐり逢う（註19）

にみるように

東方----観音
 南方----薬師
 西方----弥陀
 北方----釈迦
 中央----大日

となっている。同じように、中在家での注連おろしの段では

注連おろし 下ろすさとさに千早振る
 ちはふる神の前となるらん
 東方東は薬師の浄土で注連おろし
 下ろすさとさに千早振
 ちはふる神の前となるらん

次に南方観音・西方阿弥陀・北方釈迦・中央大日とそれぞれ各一方に三回ずつ順次繰り返す。このとき東から順次南西北と方向を変えて唱え、そして北から逆行して、東に向う。これが中央であるとことはすべて他の五方位の場合と同じである。

と、あるが

東方----薬師
 南方----観音
 西方----阿弥陀
 北方----釈迦

中央----大日

と、位置づけされている。通常は東方薬師であり、南方観音であるが古戸の高嶺では入れ違っていることになる。

早川は、祭文のこのような違いについては何もふれていない。また、これまでもそのことが意識されてきてはいない。しかし、祭場は、これらの五方位の神々あるいは仏を招くことから始まり、この世界を祭の祭場に凝縮するという作業が行われていると考える事が出来るのである。ただ唱え事の中から、この方位のズレの問題は次のように考える事ができる。現在では、「確かに違うけれども、このように教えられてきたもんで、それを受け継いでいる」(古戸 宮人 佐々木経人氏)

五方位の重要性がしっかり意識されていたと言うことを前提にするならば、この表現はただの伝承の間違いと見るべきか否という問題になる。

だが、北設楽郡史(註20)御神楽中の「御祭礼古伝式順序」の「ゆげどう」ではにたような方位の違いを見ることができる。

- 1 東方には薬師のしどのや七えをあけて
やえをひらくひとえとて神きりし。
- 1 南方には阿弥陀の同(ママ)。
- 1 西方にはくわんおんせいしの同(ママ)。
- 1 北方にはしゃかのだいくのたてしの同(ママ)。
- 1 中央には大日によらいのたてしの同(ママ)。
- 1 ささのはよ々 けんつるぎをもささできよむる
とんやな、火ころのけたいをささできよむる、とんやな。(富山村)

ここでは

東方----薬師

南方----阿弥陀

西方----くわんおんせいし(観音勢至菩薩であろう)(筆者)

北方----しゃか(釈迦)

中央----大日によらい(如来)

となり、また古戸の場合とも異なっている。

この他、注目すべきところは富山（とみやま）である。富山では祭礼が熊野神社での境内で行われるからか、熊野の神という表現が多々出てくるのであるが、基本的には振草や、大入系のそれとは変わらないであろう。この富山の「しめのはやし」（註21）には祭に用いられるものの由来が事細やかに綴られている。そのことを検討してみたい。これに類似した祭文は、『花祭伝承集』に収録されている。（註22）

早川は、「こぎひろい」を へっつい（竈）清めの段で

湯立てのときの「うたぐら」は、湯立てに至るまでに材料として選ばれた物の、神聖であることの所以をといたもので、たとえば竈を築いた石や土から、焚く櫓の末に至るまでを残らず数え上げたものである。この「うたぐら」を「こぎ」と言い、次々に数えたててを「ひろう」という。

と、説明している（早川（I） 頁87）。この「こぎひろい」は上黒川、山内、間黒、坂宇場にも見ることが出来る。少し形式が異なるが、「竈の神祭文」（註23）に見ることができる。この祭文では、竈の神の御本地を説くものである。しかし、内容的に富山や、先ほどのこぎひろいとは異なると考えられるので、ここでは富山の祭文を中心として考えを進めたい。富山の祭文に注目する理由は他のものと比べると文章的に長い、つまり文字数が多いわけだが内容的に難解な表現が多く他の祭文に比べて古形ではないかと思慮するからであり、他の地区の祭文に比較して、内容的に富山の祭文のほうが物語性が豊かであるからである。さらに、この「しめのはやし」に注目するのは、結界を結び、神おろしを行う上で大事な儀式と考えるからである。「神寄せ」、「殿付け」などよりも前に行われるべきものであり、勧請すべき神々を迎えるにふさわしい場所として「聖化」されていることを示しているからである。

4 「しめのはやし」を考える

（シメを下ろす過程 あるいは呼び出されてくる神々の世界）

ここでは、『北設郡史』所収の「しめのはやし」（註24『北設郡史』 170-178頁）をもとに論を進める。郡史ではただ、段落に分けているだけなので、便宜上分けられている段落に番号を振ってみる。そうすると「しめのはやし」は七十段に及ぶ。

第一段が、

にしはあんのう ひがしはこんのう

で始まる「しめのはやし」は、各地のこぎひろいと同じ唄い出しになっている。しかし、あんのう、こんのうが何を指すのかは明確にされていない。ここでは、意味を追求しながら「しめのはやし」を考えてみる。注目すべきところはとくに、第一段である。

にしはあんのう ひがしはこんのう

この段の にしは西であり、ひがしは東であろう。また、「こんのう」が、紺殿=こんおん、の音韻変化と考える事が出来るならば、それは「寺」(註25)の意味になる。もちろん、この仮説のためには言語学及び国語学的な検証が必要となる。そして「あんのう」は安養、安穩の発音が互いに影響を請け合った連声であると捉えれば、仮説として、この地は阿弥陀浄土の思想を背景とした安穩な領域と言う設定になる。つまり、祭の式を行うこの地が、選定される理由を明示しているといえるのである。しかも、そこは仏教的意識を背景としてなり立っていると考える事ができるのである。そのことはさらに、祭文を読み進めれば明白となる。

第二段は、

しきなればしきほどもうすよいくたびも

おうめしこしめしたまのみうとう

「しきなれば」の解釈に問題がある。しきを事の成り行き、律令格式などさまざまに見ていくことが可能になるが、しき=始期と捉えることはどうであろうか。「始まりのトキであるからこそ幾たびも(聖なる場所であることを)申し上げる。それに応じ聞こし召されたのが「玉の御鳥と兎」であると解釈したい。それは太陽と月を象徴するものであり、日月をこの場に召還したことになる。つまり、この「しめのはやし」は注連を下ろす場所の始原性を解き明かしていくことになる。もちろんこの場の清浄性も問題になる。いかにこの地が清いものであるかを説きながら、さらにこの場所が定められた理由を説きながら、祭礼の支度を調べ、清浄なる地であることをうたいあげ、肅々と祭礼の支度を進めていくのである。

第一段 にしはこんのうひがしはあんのう。

第二段 しきなればしきほどもうすよいくたびも

おうめしこしめしたまのみうとう

そして、二段目後半であるが、事の成り行きに従って始まりの時を何回も告げることによって、その言葉に応じ、聞こし召されたのが「玉の御鳥と兎」であると読む事ができるのである。それは太陽と月を象徴する「鳥と兎」の招来と言うことになる。太陽の象徴としての鳥、そして月の象徴としてのウサギは古来より知られているものであり、この表現は祭文の奥深さを示してくれる。つ

まり、この「しめのはやし」は注連を下ろす場所の始原性を解き明かすだけでなく、この場所がいかに清浄な地であるかを訴え、この場所が選定された理由までも解き明かしていくのである。

さらにこの場所が定められた理由を説きながら、祭礼の支度を調べ、清浄なる地であることをうたいあげ、粛々と祭礼の支度を進めていくのである。

第三段 この石はいづくの石とつかこえて

のうつかこえて にのつかの石（二の塚？筆者）

と、石の由来を説き明かすことによって、しっかりとした礎石の上に築かれようとしていることを示す。ただ、つか、その意味することが不明であり、にのつか、そこの石も不詳である。二の塚の意味が不詳である。本来「二」には「二の舞」のようにもどきなどに通じる意味世界がある。そのことを推し進めると、本来の神の世界に至ったことの暗示なのであろうか。「のうつか」の、のうとは「野」ではないだろうか。野、原ここには現代では解らない領域が広がっているように考えられる。

第四段 このつちは、いづくのつちとくねこえて

のうくねこえて、にのくねのつち

にのくねのつち（土？筆者）

内容は第三段に準じる。

第五段 このすさはいづくのすさとさとこえて

のうさとこえて、ななさとのわら

野と里、を越えて集めてたななさとのわら（七郷の藁？筆者）

すさは、壁を塗るときに刻みいれるつなぎ、藁などを意味する。ここでは、竈を設けるときの土に塗り込める藁を、暗示しているのであろう。七郷から調達したことを唄う。つまり、人々が力を合わせてこの場所の聖化に取り組んでいることを示している、と理解したい。

第六段 このかまはいづくのかまとくにこえて

のうくにこえていすのしのかま

使用する鎌、あるいは竈の由来を語る。

はるか遠くの伊豆の篠鎌と見るべきか。第五段との関連を考えると、鎌であろうか。だが、しのかまという名称は不詳だが、篠竹、同様に細い鎌を意味するか？。

- 第七段 このふたはいつくのふたとおくやまや
とやまがおくのさわらきのふた
遠山の奥のさわらのき？か。檜科の樹木。香りの良い素材を意味するか
- 第八段 このおけはいつくのおけとひだのやま
ひだのたこ（く？ ママ）み（飛騨の匠か？）のまげしなるらむ
祭で用いる道具の由来が述べられている。飛騨の匠の手になる曲げものであることを示し、由緒のあるものが用いられていることを用いていることを明かしている。
- 第九段 このさしゑはいつくのみつとたきこえて
よしのたこみがまげしなるらむ
さしゑが何か不明であるが、吉野の匠の手になるものという。
筆者には、吉野匠が何者なのかは不詳である
- 第十段 このみづはいつくのみづとたきこえて
のうたきこえてななたきのみず（七滝の水？）
汲上げてきた「水」が、七滝の水であることを言っている。この七滝という表現はよく用いられる。また、いくつもの野と滝を越えてきたことを唄っている。
- 第十一段 このひうち（火打ち？）はいつくのひうちとひょうをります
ひひだりやはたのかじのがひうち
この火打ち石が何処のものかを申し上げます。八幡の鍛冶がもちいる火打ちいしであると明言している。
- 第十二段 このかどはいつくのかどとくまのなる（熊野の門？）
こぜからいしのかみのともし
「かど」を、どう受け止めるかに問題がある。後半の「からいし」を唐石と読み、河図（かど）と解くことを許してもらえるか否かがになる。五行思想を祭の根底に有しているならば、この思考は許されるものかも知れない。つまり天地の変化を占う手段の八卦であり、熊野に由来する神の道を知る灯火となろうか？
- 第十三段 このこぎ（小木？）はいつくのこぎとおくやまや

とやまのおくのとりやまのこぎ

遠い山の奥で採ってきた小木？なのだろうか。それとも、古記あるいは古儀と解釈する余地はないであろうか。

第十四段 このしをはいづくのしをとほまこえて
のうはまこえてななはまのしを(七浜の塩?)
しをの由来を説く段であろう。

第十五段 このささは(笹)いづくのささとみやこえて
のうみやこえてななみやのさと(さ ママ)(七宮の笹?)
この段では、祭の準備に用いられる調度である「笹」を唄い、次にこれらがいかに聖なる物であるかを述べていく。つまり金山の神が関わった物であることを述べるのである。そして金山の神の存在を唄うのである。

第十六段 かな山のかりするのうにてしかこめて
とらぬはむしゃのならないなるらん

第十七段 つるぎたつもろろが山をわがふめば
ゆおをがそでにはそでかさなる。

第十八段 かな山はめでたい神でちりながら
かみかぞねらうわみやのさむろう

この、十六、十七、十八段ではめでたい金山の神が唄われている。神の数を数える、つまり神にお付きをするの三郎、ということになる。次の「天狗祭」の段では金山彦の神が出てくる。

第十九段 石をしょうじて。つちをしょうじて。
すさをしょうじて。かまをしょうじて。
ふたをしょうじて。おけをしょうじて。
さしゑをしょうじて。水をしょうじて。(句点 ママ)

ここでは石、土、すさ、かま、ふた、さしゑ、水が勧請されている事を述べている。いうなれば、ここは原点であり、それ故に清浄な地点であることを説く理由となっているといえる。

本来ならば、格段ごとに詳しく解釈を述べていくべきであろうが、すでに予定している枚数を超過している。故に、これ以後、大まかに各段の説明していくことにする。

この唄では祭礼の原点、祭礼でもちいられる諸々の品物の来歴が細やかに歌いあげられているわけだが、この種の来歴を述べる様式は、北欧神話の「カレワラ」を連想させる。そこでも同様に、ものの由来、あるいは古儀が説かれているのである。そして、興味深いことは二十一段での神の結婚(神婚)である。この段までに顕れてくるのはかなやま(金山)の神であるが、人々の浄める竈の持つ意味が明らかにされることになる。つまり、金山神の誕生の由来であると言っても良い。だからこそ、唐突であっても「こんれい」が唄われ、その結果としてのという詞が繰り返される。また、ごりょう という表現も繰り返され、しょうじゃ=精舎 にはしょうじの注連かけをすると唄う。(十九~二十二段) しょうじとは精進のことであろうか。七重にも八重にも注連かけを行いながら、五方位にさらに注連をかける。つまり、中心の設定であり、神のいます場所の設定が完成したことを唄い上げ、村がますます栄えることを保証していく。ここでの「こんれい」を、どう理解すべきかという問題がある。素直に婚礼と読むべきかである。金山の神の婚礼の場所として、精舎が唄われているのであれば、この「しめのはやし」七十段は金山の神を招き、彼らによって産み出された諸々の神々によってもたらされる幸せを寿ぐものと言うことになる。そのように解釈することができるとなれば、これは天地創造の物語ではなく金山の神とその婚礼が重視されている物語なのである。金山の神の婚礼とは、何を意味するものであろうか。火と水、石と土など古儀に乗っ取りながら設定された場所での神々誕生の場に立ち会うことが、ここでは本来の古義なのであろう。そうなると、ここには金属、すなわち鉄の誕生を見ることが可能となる。

花祭の中で唱えられるこぎひろいとは、古義、すなわち昔の物語を探し、物語の再確認を果たすところから始まっていたと言うことをすでに指摘した。聖なる地の確認、そこで用いられる調度の由来の確かさを元に祭が、始原の姿で再現されていく。だからこそ、祭に携わる人々に古義の確認が求められていったのである。花祭などの唄蔵では、こぎひろいとは小木(小さな木 あるいは 薪)と解されていることが多く、祭の庭火や竈で燃やす小木と受け止められているように考えられる。著者は、祭の古い意味づけであって欲しいと考えている。そして、この唄蔵を通じて祭に携わる人たちは、唄を通じて四季を見立て、冬の吉日に錦のように敷き詰められた雪の世界を歩いていくのである。それを塵として神にさしだし、神のくれた氷の橋を渡って、(つまりは、渡りがたい世界を越えて)神の世界に赴き、その諸々の神の領域を次の段から唄いあげていくのである。

神の世界、そこで唄われるのは象徴としての伊勢の国であり、更に言うならば高天原である。

第三十一段

いせのくにまいるはとおしきぬなれわ（ば）
おりてたたみてちかくまいるらん。

と、はじまり、二見浦から伊勢の阿漕が浦まで唄いあげる。

（細かいことは別稿に譲ることにする）

そして、熊野路を唄うが、熊野山、きりせが森にとどまる。神々を舞遊びへと導きながら
つるぎたつ、もろうが山をわがふめば
ゆおうがそでにはそでかさなる

そして、第四十七段ですみよし、かすまじ（かしまじ？か）と唄い、いせうみこ（伊勢海子か？・筆者）が登場する。

おとかが（おとう、かがが？か）いなくても
あれどもかみのちかいなるらむ

と、神の思し召しに重点をおき神の子であることを唄い示す。

その後の段で伊豆の国、大島へと場所は移り、東国を主題として唄う。

このつるぎたつとは、けわしい山のことであろうか。（第四十七段）そしてゆおう（湯王）とは、祭の中で勧請される「湯の父」のことであろう。そして、「そでにそでかさなる」とは湯の中で、湯の父と母の出会いを暗示していることになる。

ここまでのところで、注意したいのはウタグラの世界が伊勢、熊野、伊豆、東国へと移っているところである。言うなれば、（伊勢の国から）南から東へと唄っているのである。

伊勢 →→ 熊野 →→ 伊豆 →→ 大島 →→ 東国(鹿島路を辿り)→→
そして 諏訪に至る。

諏訪は、次のように唄われている。

すわのうみ、みなそこてらすこだま石
てにはとれども袖はぬらさじ（第五十三段）

このこだま石をそなえる唱え事は、東栄町布川のシカウチでも聞くことができる。

「年の初めの年男、今日一宮に参ってそうろう」（旧暦正月の五日の行事・筆者）

と、氏子の一人が河原石をこだま石として奉納するのである。

もちろん、この種のうたぐらは、花祭の中に見ることもできる（註26）。

この「しめのはやし」の中の道筋は大変興味深い。なぜならばいったん熊野を經由させているところにある。熊野が、この北設楽界隈にどのような位置を占め、重きを置いていたかは、今後の研究に委ねられるが、東栄町では中在家をはじめとして御園、足込など各地に熊野神社が存在している。もちろん古戸にもある。

このように、「しめのはやし」は竈の設置にまつわる、物語をしている。しかも、それはいくつもの聖地をめぐりながら五方位をしっかりと固めながら行っているのである（註27）。

また、さらに富山では禰宜の行事として天狗まつりの次第があり、そこでは

- 1 東方にはくぐつちの命
- 1 南方にはかぐつちの命
- 1 西方にはかなやまびこの命
- 1 北方にはみずはめの命
- 1 中央にははぎ山びめの命 終り。(ママ)（註28）

と五方位の神々の勧請を基に固めが行われていく。

これも、祭の竈設置に向けての前段階での処方と見ることができよう。

今回、花祭の「しめのはらい」に注目してみた。残りの段については別稿に譲るが、早川孝太郎をはじめ多くの先賢たちが採集、収集した諸々の祭文類の読み込み分析は急務のことではないだろうか。現在多くの集落では過疎のため、祭の存続そのものが危ぶまれている。形式的に残ることはできるかも知れないが、祭の背景に秘められている世界観の存在は忘れられ始めているといえる。

はなまつりは、この種の呪術的な行いの積み重ねによって、ようやく竈祓いが行われ準備が完了するのである。祭は、この後もさらに続いていくのである。それは、雄大な神の物語りの儀式に他ならないと考えるのである。

<<<註>>>

- 註1 『花祭』前編(719頁)・後編(870頁、索引付き) 昭和五年 岡書院 から出版される。昭和六十三年に国書刊行会より復刻される。本論文での引用などは、基本的に早川孝太郎全集(未来社)(初版1971)1978第二刷のⅠ、Ⅱ巻を使用することにする。ここでは早川(Ⅰ)、早川(Ⅱ)と記す。
- 註2 著者はこれまでさまざまな形で、この方位の問題を論じてきた。中心となるのは①「北設楽の花祭」『宗教研究』二六〇号(昭和五九年)日本宗教学会(1~24頁)この他にも②「宗教的施設と村落空間の構成」『宗教研究』第五七巻四輯 昭和五九年、③「宗教施設と方位について」『宗教研究』第五九巻四輯 昭和六〇年、④「神道(カンミチ)に見る方位<北設楽の花祭-Ⅱ>」『行動と文化』第八号昭和六〇年、⑤「花祭神道の色彩に見るいくつかの問題」『宗教研究』第六〇巻四輯昭和六二年、⑥「花祭に見る神話的側面」<北設楽の花祭-Ⅲ>『名城大学人文紀要』第36集 昭和六二年⑦「日本の祭に見るインド的世界観について」<北設楽の花祭-Ⅳ>『印度学仏教学研究』第三六巻一号昭和六二年、⑧「花祭に見る神話的側面-試論-」『宗教研究』第六一卷四輯 昭和六二年、⑨「仏教的宇宙観の日本的受容について」<北設楽の花祭-Ⅴ>『東海仏教』第三三輯 昭和六三年⑩「花祭の飾りと霜月祭」『宗教研究』第六二巻四輯平成元年、⑪「祭に見るインドの要素の受容と変容-天竜川流域の祭礼を中心として-」『印度学仏教学研究』第三九巻一号平成二年、⑫「民俗に見る宇宙観-異界との接点を求めて-」『東海学園女子短期大学紀要』第二九号 平成六年 の論文がある。
- 註3 早川孝太郎著作集(Ⅰ)(1971) 以後早川(Ⅰ)と略記 52頁
- 註4 前掲書 86, 87頁
- 註5 前掲書 115~118頁
- 註6 前掲書 101頁
- 註7 前掲書 101頁
- 註8 77~79頁
- 註9 早川(Ⅰ) 157~158頁
- 註10 早川(Ⅰ) 78頁
- 註11 拙論「北設楽の花祭」『宗教研究』二六〇号 日本宗教学会 昭和五九年
- 註12 早川(Ⅰ) 96頁
- 註13 早川(Ⅰ) 105頁
- 註14 早川(Ⅰ) 110頁
- 註15 早川(Ⅰ) 111頁
- 註16 早川(Ⅰ) 113頁
- 註17 早川(Ⅰ) 114頁
- 註18 早川(Ⅰ) 105頁
- 註19 早川(Ⅰ) 96頁
- 註20 北設楽郡史 181頁
- 註21 北設楽郡史 170-178頁による
- 註22 花祭伝承集 平成五年 この伝承集は豊根村の三沢山内、間黒、坂宇場、下黒河、上黒川の花祭保存

会長名で各地区の花祭のしだい、祭文などが収集されているもの。

註23 『奥三河小林花祭』片桐美治 私家版 昭和五十七年 54頁

註24 北設楽郡史 前掲書

註25 祖庭事苑 望月仏教大辞典

註26 上黒川・花祭伝承集平成5年 7頁 間黒 花祭伝承集 13頁

註27 東栄町誌 伝統芸能編(平成十六年)「神いれ」66頁では下粟代の例を示している。

他に、足込68頁では「天の祭」での祭文が示され、さらに古戸などの例が示されているが、それらは「殿付け」の中での祭文に過ぎない。ただ、「しめおろし」については、ようやく布川の例が示されているに過ぎない。

東方東はやくしのじょうどでしめおろす

おろすおろすさとさにちはやぶるちはやぶるかみがうけてよろこぶ

南方南は神代の浄土でしめおろす

(以下「シメオロス・・・受けて喜ぶ」は繰り返し)(『東栄町誌』79頁ママ)

西方西は阿弥陀の浄土でしめおろす・・・・

北方北は釈迦の浄土でしめおろす・・・・

中央中は大日浄土でしめおろす・・・・

と、あり、五方位の表現も微妙に異なっている。これらの『東栄町誌』で示された例では、神寄せの中での次第に変化していると考えられる。そのことは、祭場がすでに設定されてからの儀式となっていることを示していると考えて良いかもしれない。

つまり、花祭の大事の中で重要な要素が、竈の設置そのものに視点が移り、竈を設置するまでの前段階の重要性が忘れられてきたと考える事ができそうである。

註28 北設楽郡史 183頁

註29 北設楽郡史・民俗資料編 北設楽郡史編纂委員会 昭和42年 125～6頁

早川(Ⅰ)(1971) 102～102頁